

# ボストン大都市圏におけるアメリカ市民の日本観

志賀恭子

文化とは、人びとが生活するなかに存在する「意味の網の目」である。  
その意味とは、ことば、工芸品、礼儀作法、慣習などのなかに象徴性  
があり、その象徴性もつ意味のことである。

— クリフォード・ギアーツ —

## I はじめに、

「ボストンは親日的である」ということを頻繁に耳にする。筆者も2009年から2012年までボストンで暮らしていた際、確かにボストンは親日的だと感じた。日本人であるということで、日本人ではない人たちから日本について尋ねられることが多かったし、日本に関することを日本人の筆者に嬉しそうな表情で話されることが度々あった。日常的に起こったこの経験から、ボストンの人びとの日本観について探求したいと考えるようになった。

本エスノグラフィーは、ボストン大都市圏（以下、ボストン）在住のアメリカ市民に焦点を当てる。彼らが日本文化を生活のなかに取り入れ始めた動機（日本文化の接触要因）と、取り入れ続ける理由を明らかにした上で、日本文化と接触したことによってどのように変容したのかを考察する。ボストンを取り上げる理由は以下の通りである。ボストンでは日本開国以前よりすでに日本人とボストンの人びとの間で交流が始まっており、それらがやがて姉妹都市や国家レベルの日米交流に繋がった。19世紀半ばから始まった日米交流の影響を見る上でも、ボストンを研究対象地として取り上げる意義がある。

聞き取り調査を行うなかで、調査対象者の日本文化接触要因について、日米間の社会情勢が調査対象者の人生に直接影響を与えていた事例や、彼らがボストンと日本間における先人たちによる交流や物流の蓄積を享受している事例が明らかになった。そこで、本論は、筆者がインタビューと参与観察によって蒐集したデータと密接に関連した日米関係史とボストンにおける日本文化史を述べた後、それらを照合しながら分析を行う。この研究を行うことによってボストンの人びとから窺える日本観のみならず、積み重ねられた日米交流が現在の人びとに与える影響を知ること貢献したい。

## II 研究方法

本研究は人種や民族的背景を問わず、アメリカ市民権を持つアメリカ市民を対象とする。したがって、対象には、白人、黒人、ヒスパニック、アジア人がいる。ボストンでは、年間を通して複数の組織団体が各地で日本文化を紹介する行事や祭を単独あるいは協賛で開催している。

筆者は、ワシントン本部ロングフェローハウス国立歴史公園（以下、ロングフェローハウスと呼称）主催の Japanese Culture Day (2009年8月30日開催)、ピボディー・エセックス博物館主催の Japanese New Year (2010年1月9日開催)、カジ・アソウ・スタジオ主催の Japan Festival (2010年5月2日開催)、ジョン・万次郎が縁で姉妹都市協定を結んだ土佐清水市とフェアヘブン市とニューベッドフォード市共催の「ジョン・万次郎祭」、ボストン日本協会が主催する数々のイベントに参加した。このように日本文化を紹介する行事や祭を以後「ジャパン・フェスティバル」と総称する。これらのジャパン・フェ

ボストン大都市圏地図



Google map を基図に筆者が作成

スティバルの運営者と参加者に調査協力をお願いして、同意が得られた11名に重点を置いてインタビュー調査と参与観察を行った（付録2.）。インタビューでは、用意した質問表（付録1. Questions を参照）に沿いながらも会話形式でライフヒストリーを話していただいた。インタビューの場所は、彼らの自宅、職場、活動場所、カフェ、図書館など落ち着いて話せる場所を選んだ。インタビューを行った後も、彼らが活動する場所や職場や自宅で度々面会した。被面接者の活動場所に同行し、自宅を訪ねることをして参与観察も行った。インタビューの言語は主に英語で行われたが、日本語が話せる被面接者とは日本語と英語を混ぜたジャパングリッシュであった。ジャパン・フェスティバルを運営する被面接者には、それらのイベント企画の意図や考えも尋ねた。付録2.の時間に加えて、筆者は、2009年9月から2010年12月までワシントン本部ロングフェローハウス国立歴史公園にて毎週金曜日インターンとして、2010年から2012年まで大太鼓ニューイングランド（ONE）で太鼓を習う生徒として、2010年から2011年までカジ・アソウ・スタジオと日米協会でボランティアとして参加しながら観察を行った。インタビューのデータは主に、2010年筆者がレスリー大学大学院異文化間関係修士課程に在籍していた際に修士論文のために蒐集したものをを用いている。被面接者の会話は全て筆者が英語から日本語に翻訳した。アメリカ市民個人にとっての日本文化の意味を探るため有益な方法として、エスノグラフィーで本研究を行った。

### Ⅲ 歴史的背景

#### 1 日米関係

日米の歴史は、中浜万次郎とアメリカの捕鯨船ジョン・ホーランド号のホイットフィールド船長との出会いから始まると言えるであろう。漁に出て遭難した万次郎と仲間は無人島で過酷

な生活を送っていた際、マサチューセッツ州ニューベッドフォード（地図参照）出航のジョン・ハウランド号の乗組員たちによって助けられた。当時、日本は鎖国をしていたためにアメリカ人たちは日本に近づくことができず、万次郎たちをハワイまで連れて行った。万次郎は仲間と別れて、ウィリアム・ホイットフィールド船長の故郷マサチューセッツ州フェアヘブン（地図参照）へ行くことにした。万次郎はホイットフィールド船長の養子となり、フェアヘブンで英語、数学、測量、航海術を学んだ。彼が生まれ故郷の土佐清水に戻るのは1853年のことである。マシュー・ペリー司令官が日米和親条約を締結するために来日した1854年、英語を習得した万次郎は日本の開国に貢献した。

明治時代に入ると、日米間を往来する人々、長期滞在者や移住者が現れた。当時のアメリカは、黒人奴隷制度の廃止を行ったため労働力不足に陥り低賃金労働者を歓迎していた。渡米日本人も一時滞在労働者として低賃金で雇われていたが、年月が経過するにつれ農場所有者や店の経営者になり、アメリカで家庭を築いたために永住者やアメリカ市民になる者が続出した。

しかし、20世紀初め、西海岸を中心に、日本人の経済的成功と、1906年の大日本帝国がロシアを征服したことが反日感情を生む引き金となった。同年、サンフランシスコ教育委員会は日本人児童の隔離を決定し、1924年には日本人を含むアジア人のアメリカ入国を制限する移民法が制定された。1941年の真珠湾攻撃により、日米間は益々緊張感が高まった。その著しい例の一つとして、日系移民は土地を含む所有物をアメリカ連邦政府に剥奪され、収容所に強制移住させられた。

第二次世界大戦終戦後から1952年まで、総司令官ダグラス・マッカーサー元帥が率いる連合国軍最高指令官総司令部（GHQ）が日本を占領した。GHQによる日本占領は日本を民主主義国家に向かわせ産業化へと導いた。1951年、サンフランシスコ平和条約（日米安全保障条約）締結は、それまで敵国同士だった日本とアメリカを同盟国にし、経済的な関係強化を約束した。GHQ撤退後、日米双方の利益としてアメリカ軍が日本に駐屯することになった。GHQやアメリカ軍が日本駐在している間、アメリカ人男性と結婚して渡米する日本人女性が現れた。

1950年代より1970年代にかけて、高度経済成長期と呼ばれるように日本は著しく戦後復興を果たし、1980年代から1990年代、日本はニューヨークの大都市に支部や事務所を構え駐在員を送り果敢に海外進出を行った。しかし、アメリカにおける日本の経済発展に対して反感をもつアメリカ人が増え、ジャパンバッシングが起こった。ジャパンバッシングとは、1970年代から1980年代にかけて自動車産業を中心に日本企業がアメリカに進出したことにより、アメリカ人の間で就業機会が奪われたという理由で反日本感情が高まった社会的現象である。当時の報道でも、日本製の車が壊された事件が頻繁に取り上げられた。オノ（2009）によると、その当時野球球団のシアトルマリナーズが日本の投資家に売却されたことについて、アメリカ市民はアメリカの野球の純正（purity）が汚されると反対した（p. 55）。日本の経済的海外拡大は、アメリカへの侵略と受け止められ脅威を与えた。

## 2 ボストンにおける日本文化

日本文化は、19世紀より始まったジャポニズムの波や、日米間を移動した人びと、テクノロジーの発展を通じてボストンに浸透した。1867年パリ万国博覧会を筆頭に、1876年フィラデルフィ

ア万国博覧会（アメリカ独立100周年祭）や1893年シカゴ・コロンバス万国博覧会で展示された日本の絵画、陶器、絹、銅製品は人気沸騰した。それが契機となり、日本美術や家具を売る貿易産業は盛んになり、芸術家も日本美術の技巧を真似て自分たちの作品に取り入れるようになった。いわゆる、西洋社会におけるジャポニズムの到来である。

ボストンにおけるジャポニズムの到来は、旅行者やお雇い外国人として日本に滞在した外国人にも起因する。アメリカの詩人ヘンリー・ワーズワース・ロングフェロー（1807-1882）の長男チャールズ・アップルトン・ロングフェロー（1844-1893）は1871年から1873年まで20ヶ月間東京と横浜に長期滞在していた。チャールズは日本中を旅し、旅した場所や日本の生活を写真撮影して記録を残した。芸者を被写体とした写真が多いが、とりわけ貴重なのはアイヌのんびとやアイヌの居住地の写真である。当時彼が住んでいた家は、立教大学が建てられる以前の敷地内あるいはその近くにあったと言われている。現在でも残っているその屋敷の写真から、立派な日本庭園付きの純日本式の武家屋敷で暮らしていたことがわかる。彼は滞在中に日本の工芸品や美術品を数揃えて、帰国する際それらをケンブリッジ市（地図参照）ハーバード大学敷地近くの自宅ロングフェロー邸に持ち帰った。持ち帰った物は、屏風、家具、仏閣内で供え物を置く前卓といった大きい物から、手ぬぐい、着物、小物などに至る。

現在、ロングフェローハウスには、チャールズが持ち帰った多くの蒐集品が西洋文化の装飾品と共に展示されている。チャールズの部屋には、日本の物を集めて「ジャパルーム」を作ろうとしていた形跡がある。

本来、ロングフェローハウスはジョージ・ワシントンが本部として使用していた場所であった。その家は、ヘンリー・ロングフェローとフランシス・アップルトン（1817-1861）が結婚した際に、妻の両親のアップルトン夫妻によって結婚祝いとして贈られた家である。この家は、ジョージ・ワシントンとヘンリー・W・ロングフェローと縁があるため、アメリカの歴史や文学を語る重要な家として扱われている。一方で、ロングフェローハウスはチャールズの日本からの蒐集品の保存と展示をしている故に、日本文化を紹介する行事を催すことがある。

1877年から東京帝国大学で教鞭をとっていたエドワード・シルベスター・モース（1838-1925）は、日本滞在中、日本の日常生活に関心を寄せ茶碗や料理道具などの日常生活用品を蒐集した。1879年にアメリカのセラムに戻った際、それらを持ち帰りピボディー・エセックス博物館に提供した。モースの紹介で、東京帝国大学で政治経済と哲学を教えることになったアーネスト・フェノロサ（1853-1908）も、日本美術に非常に興味を持ち日本の美術品を蒐集した。それらは、現在、ボストン美術館に保存されている。1882年にモースと一緒に日本を旅をしたウィリアム・ビゲロー（1850-1926）もまた日本美術蒐集家となり、浮世絵や版画をボストン美術館に寄贈した。フェノロサは、弟子の岡倉天心（1862-1913）を助手にしてボストンへ連れて帰った。フェノロサと岡倉はボストン美術館東洋部長に就任し、日本美術の紹介に尽力した。19世紀、日本の製品、美術、工芸品に向けられた彼らの熱狂的な愛着心が、ボストンにおける美術館や博物館の後世に繋がっている。

渡米した日本人によってボストンに伝わった太鼓と茶道の歴史は以下の通りである。戦後、日米間で緊張感が残るなか、1967年に移住した田中誠一はサンフランシスコで太鼓道場を開いた。田中がアメリカで最初に太鼓を伝えた人物であると言われている。田中が伝授した太鼓奏

法は、日本の武道と日本舞踊がもつ伝統的な所作と現代的なダンスの要素を融合させた形である。その後、彼の弟子たちによって西海岸を中心に太鼓が広まった。1979年、東海岸で初めての太鼓集団「僧太鼓（Soh Daiko）」がニューヨーク仏教会の場所を使って結成された。1994年、僧太鼓（Soh Daiko）に所属していたエレン・フォンが、ボストンで太鼓愛好家と始めたサークル「大太鼓ニューイングランド（Odaiko New England, ONE）」を結成した。ONEは2005年より非営利活動法人となり、ボストン大都市圏初の太鼓大集団と化した。

東京から移住した画家であり、哲学者であり、茶人の花見麻生（1936-2006）は、「芸術を通して、東洋と西洋の違いを埋めるような全世界に通じる価値観を見出すために」1973年カジ・アソウ・スタジオ（Kaji Aso Studio）を開いた（Kaji Aso Studio, 2010）。ボストン交響曲ホールの後ろに位置する、レンガ作りのカジ・アソウ・スタジオは、地下には陶芸教室、庭には鯉が泳ぐ小さな池がある日本庭園と茶室、一階にはギャラリーと書道の稽古場としてのスペース、二階には水彩画教室と事務室がある。その他、俳句教室も開講されている。週末にはコンサートやジャパン・フェスティバルが開催され、毎年二月には豆まきが催される。日曜日にスタジオ内茶室で予約者のみに茶道体験プログラム「茶会」が開かれている。花見麻生に師事したアメリカ人の弟子たちは、現在でも彼から学んだ哲学、季節や自然を大切に作る心、筆遣いを忠実に守り、それらをボストンの人びとに伝えようとスタジオの運営を続けている。

大太鼓ニューイングランドとカジ・アソウ・スタジオは、ボストン各地開催のジャパン・フェスティバルで毎回披露参加する団体である。他方、ジャパン・フェスティバルや日米交流行事の運営を積極的に行っているのがボストン日本協会（The Japan Society of Boston）である。この団体は、1904年に設立され、アメリカで現在35ある日本協会のなかで最も古い団体である。日本協会の活動は、日本人と日本人でない人たちが交流するために、日本の映画上映会、講演会、コンサート、夕食会なども企画開催している。

日本以外の国で、生け花、茶道、折り紙、行動、書道などといったいわゆる日本の伝統文化は、地元の団体や姉妹都市や大使館が開催する日本文化を紹介する行事で広まるという。ボストンでもこのような日本文化を紹介する行事が各地で開催されている。ギチャード・アンギ(2001)は、ジャパン・フェスティバルに参加する人びとについて「日本の本物を求めるというより、未知の国の文化的表現への好奇心を満たすために来る」と述べている（p. 211）。

### 3 メディアによる日本文化の普及

国際政治学者ジョセフ・ナイ（2004）によって『ソフトパワー』が刊行されてから、ポップカルチャー（大衆文化）、高等教育（高級文化）、広報文化外交（パブリック・ディプロマシー）が改めて注目され検証されるようになった。言語、教育、博物館（美術館）、経済などの動機によって普及された日本文化があるなか、ここでは電化製品や印刷物の媒介によって拡散された日本文化について述べる。電化製品や印刷物の媒介とは、テレビ、映画、テレビゲーム、DVD、コンピューター、本など、アメリカの人びとが日常生活のなかで容易に入手できる手段のことを指す。本論では、これらの媒介手段をメディアと呼ぶことにする。

1960年代テレビの普及に始まり、その後現在に至るまで、ビデオ、テレビゲーム、コンピューター、DVDプレーヤーなどのテクノロジーは進化してきた。それらの発達により、日本の漫画、

アニメ、ドラマ、テレビゲーム、カラオケ、歌が世界中に拡散しグローバル化している（ベフ、2001）。日本の武道（柔道、空手、合気道、剣道）に関しても、1960年代以降、オリンピック競技大会や各競技大会のテレビ放送が日本の武道をさらに世界に知らしめた（ベフ、2001, p. 13-14; デニンソン、2007, p. 319）。映画について、溝口健二（1898-1956）、黒沢明（1910-1998）、小津安二郎（1903-1963）、北野武（1947- 現在）は、それぞれ個性的で独創的なスタイルを持った映画製作者として評価されているため、彼らの作品は世界的に人気を占めている（フィリップス & ストリンガー、2007; p. 16）。ライラ・アブルゴド（1999）によると、「テレビというものは『社交スペース』であり、生活観、繊細さ、考えの違いからできる境界に対する突破口であり、また国境を越えて一つの文化を共有する媒介である」（ラーキン、1996; アブルゴド、1999, 112～113頁）。

次に挙げる事例は昨今、アメリカにおける日本語教育界で屢々言われることである。外国人が日本語学習をする動機として、嘗て「ビジネス志向の学生」が将来を見据えて日本語を学習していた。しかし最近では、日本のアニメ、漫画、テレビゲームなどのポップカルチャーが動機となって日本語学習をする学生が増加しているという（パーカー、2004; フクナガ、2006, 206頁）。筆者が2007-2009年日本語科の助手をしていたメイン州コルビー大学でも、日本のアニメや漫画に惹かれて日本語を選択した学生が多かった。フクナガによると、日本のアニメや漫画の魅力は、アメリカ人にとって自分たちが知らない日本独特の生活習慣、和食、仕草、アドベンチャー、日本のスポーツ、ロマンスを教えてくれるからである。アニメや漫画ファンの日本語第二外国語習得者を二つのタイプに分類することができるという。①日本語をアニメコミュニティ内で使うことのみで満足する学習者と、②アニメや漫画が契機となって、そこから延長して日本の歴史、伝統文化、現代文化、社会、言語、文学、武道などに関心を持ち、さらには日本に携わる職業に就く者がいる。

## Ⅳ データ

11名の調査対象者のライフヒストリーから集めたデータを彼らの日本文化との接触要因によって整理してみたところ、「日米関係が直接個人に与えた影響」「ジャポニズムの名残」「メディアの産物からの派生」といった3つの様式に分類することができ、上記の歴史的背景と密接に関連している。ここではそれらのパターンを紹介する。

### 1 日米関係が直接個人に与えた影響

#### (1) マーク・ヒデユキ・ルーニー

ボストン市外から車でおよそ30分離れたウーバーンという町に、中国系舞踊団が所有する建物がある。ここは、大太鼓ニューイングランド（ONE）のDojo（原語、道場のこと）である。毎週火曜日19時からこの建物の中に入ると、さらに向こうの扉と入口傍にある階段下から大勢が声を揃えて何か言っているのが聞こえる。建物内のその扉を開けると、そこは体育館のような木目調のフロアが広がり正面には舞台がある。その舞台下には、20名ほどが輪になってTaisou（原語、体操のこと）を行っている。彼らが声に出しているのは、「イチ、ニ、サン、シ、

ゴ... ジュウ」だが、数人は「イチ、ニ、サン、フォー、ファイブ... テン」と言っていた。カンフーをしている人の絵が描かれたTシャツを着ている白髪まじりでショートカットの白人女性は、「イチ、ニ、サン、ス、ウー、リウ、チー、パー」と、途中から中国語に変換した。太鼓上級者は初級の生徒に数の数え方や所作を教えていた。生徒たちは見たこともない所作をすることを厭わず、むしろ楽しんでいる様子だった。遅れて教室に入って来た生徒や先輩たちは、必ず入口で一礼をしてから入り、退出する時も一礼していた。

体操をしている人の服装は、Tシャツと動きやすいズボンが一般的である。各自のTシャツの絵柄に、日本語が書かれているものが多かった。ある女性のTシャツは「米国大使館」と書かれていた。ある男性のものは正面に「祭」と大きく書かれており、その下には小さくカタカナで「ジョン・マンジロウ」と書かれていた。なかには中国文化を想起させるようなドラゴンの絵が描かれたTシャツを着ている者もいた。

そこに顔立ちは日本人だが緑色の目をした、ONE舞台監督兼講師のマーク・ヒデユキ・ルーニーが教室の入口で一礼をして、颯爽とその輪の中に入ってきた。マークが背筋を伸ばして正座で座ると、周りの生徒たちもマークに続いて正座に座り直した。マークは、輪になっている全員の顔を順々に見るともう一度背筋をピンと伸ばして、指を揃えた手を横から優雅に床になぞるように滑らせて、前で両手を揃えた。“Dozo —Yoroshiku Onegaishimasu（原語）”と笑顔で言うと、彼を囲んでいる生徒たちも手を体の前に持ってきて“Douzo Yoroshiku Onegaishimasu”と言いながら礼をした。彼の姿勢、英語と日本語の話し方は優雅だが威厳がある。

マーク・ヒデユキ・ルーニー（当時37歳）は、1968年に美術を学ぶために渡米した日本人の母親と、白人のアメリカ人ジェラルド・ルーニーとの間に生まれた。ゲイリーはジョン・万次郎をより多くの人に知ってもらおうと、全て手作りでジョン・万次郎博物館を設立した。マークは当時白人しかいなかったフェアヘブン（地図参照）で育った。筆者は彼の実家を訪れたことがある。彼の実家には、ジェラルドが作った日本の床の間があり、庭には神社の鳥居がある。両親は家庭のなかに日本文化を取り入れようとしたが、マークは若い頃、日本文化を拒絶し日本語を学ぼうとしなかった。

若かった頃、実家でたくさんの日本文化に囲まれて育った。たとえば、子どもの日やひな祭りや正月といった日本の祝日をお祝いしたさ。餅を食べて、伝統的な日本文化の慣習が家にはあったよ。物心ついたころには、箸を使って食事をしていたしね。僕が育ったフェアヘブンには全く日本と接触する機会はなかったけど、家にはあった。母が、唯一の日本と接触させてくれる存在だったよ。

残念なことに、日本語を勉強しなかったよ。というのは、1970年代当時、幼児は二つの言語を同時に習得できるとは考えられていなかった。それでさ、みんな、母に僕と姉には英語以外で話しかけないように言ってきたのさ。本当、残念だよ。語学は若ければ若いほど習得できるのにさ。

（インタビュー、2010年10月5日）

しばらくして、マークは「君に正直に言うと、僕は小さかった頃、日本人に見えるからいじめに遭ったんだ。僕の姉は日本人に見えないから、そういう目に遭わなかったけどね。」筆者は彼の姉とも会ったことがあるが、彼女は白人の父親似で日本人の面影があまり感じられない。マークがいじめに遭った頃と、アメリカで起こったジャパンバッシングの時期と重なっていたので、余計日本らしさを消そうとしたとマークは語った（インタビュー、2010年10月5日）。このような社会的背景の下、白人に見えないマークは主流の白人中心社会に同化しなければならないと考えていた。

そんなマークを変える出会いが1997年に起きた。

1997年、父が中心となって企画運営していたニューヘブンで開催されたジョン・万次郎祭をマークも手伝っていた。そこで、マークは(3.2で述べた)エレイン・フォンが演奏していた大太鼓ニューングランド(ONE)の演奏を見て、自分もプロの太鼓奏者になりたいと強く思うようになった。後日、マークはONEで太鼓を習い始めた。24歳の時である。プロの太鼓奏者になるには遅い始まりだった。数年後、ONEで太鼓の教授法を学んだ。2002年から2003年にかけて日本の中高校で英語を教えるJET(The Japan Exchange and Teaching Program)プログラムを通して、当時外国人の人口が少なかった和歌山県龍神村の高校で英語を教える機会を得た。そこで地元の太鼓集団に所属し、日本の風習を学んだ。その後、彼はプロの太鼓集団に入団し世界ツアーも同行した。マークは、帰国後、幾つかの太鼓集団にて叩き込まれた日本の礼儀作法をボストンの太鼓の生徒たちに教えている。たとえば、彼が太鼓初心者と一緒に唱える「5つの敬う心(5 Respects)」はそれを体現している。「5つの敬う心」とは、「場所(space):土地は生活につながり、場所があることを当たり前と思わない」「太鼓:太鼓は単なる物ではなく、音楽を作り出すもの、目標を達成するものとして敬う」「先生:先生が持っている知識を敬う」「仲間:仲間を敬う」「己:自分を大切にすること」である。

2011年12月11日、ウーバーンの道場で開催されたONE冬季エクストラヴァガンザはいつもの発表会と異なった。最後の演目は、マークが作曲したオリジナル7曲のメドレーを披露した。終了後、会場にいた100人~200人の観衆による大きな拍手が一斉に起こり、拍手喝采は暫く鳴り止まなかった。スタンディングオベーションをする者も数多くいた。この舞台が、マークがONE舞台監督として演奏する最後の舞台となった。マークは、太鼓を通して知り合った恋人がワシントンD.C.に転勤するため、一緒に移って結婚することを決めた。マークがニューイングランド地方で太鼓文化を広めた功績は大きく、2011年に彼がボストンを去る際、彼の下で学んだ生徒、同僚、そして彼の演奏を聴いた大勢は、彼の旅立ちを引き止めて寂しがった。ワシントンD.C.に移ってから、Mark H. Taiko Schoolを開講し、2014年ミヤコ太鼓(Miyako Taiko)を結成した。「日系アメリカ人である僕は、太鼓を極めたことによってアメリカで「文化大使」になることができた」とマークは言う(インタビュー、2010年10月5日)。彼が日本人ではなく日系アメリカ人(Japanese American)と呼ぶには経緯がある。

日本で生活するまで、自分は完全なアメリカ人ではないと思っていたけれど、日本に滞在している間、私は日本人ではなくアメリカ人であると気づいた。そして、アメリカのことも日本のこともわかるようになったいま、文化大使になるという意志を持って活動しなければい



けないと思う。日系アメリカ人として日本とアメリカの良いところを融合させてね。アメリカでそうなるには、アメリカの人びとに日本についてだけ知ってもらいたいと思うだけでなく、それを越えたアジアの文化を知ってもらいたいという意志をもつことだと思う。

（インタビュー，2010年10月5日）

## (2) ガートリユード（ユリ）・ワリス

ガートリユード（ユリ）・ワリス（当時47歳）は、マークの生徒であり、現在ONEの太鼓奏者である。ガートリユード（ユリ）の父親はドイツ系白人のアメリカ人、母親は沖縄県出身の日本人女性である。彼女も、若かった頃、母親の母語である日本語を学習しようとしなかった。彼女が育ったセーラム（地図参照）は、当時、白人が多数を占める町であった。そのため、彼女は、白人主流社会に同化しなければならないという気持ちが常にあり、日本語を母親から習おうとせず、どこかで学ぼうという気持ちも全くなかった。むしろ、思春期の頃、彼女のルーツの一部である日本を拒絶していた。しかし、今ではその埋め合わせをするかのように、毎週、太鼓に加えて盆栽、書道、沖縄の三線の習い事で忙しい。以前に比べると、日本にも旅行するともいう。また日本に行きたいと満面の笑みで筆者に語った。

彼女は、ONEの道場と書道を習いに行っているカジ・アソウ・スタジオで、先生や一部の仲間からドイツ系の父親の先祖からとった「ガートリユード」ではなく「ユリ」と呼ばれている。彼女の名前について尋ねてみると、彼女は公の場でユリという名前を使うようになったのは最近のことだという。実は、ユリというのは出生証明書に記載されておらず、沖縄にいる彼女のいとこがつけた名前である（インタビュー，2010年10月31日）。

## (3) ケイト・フィニガン

ケイト・フィニガン（ヨーロッパ系アメリカ人）は画家であり、ボストン美術館とタフツ大学が共同開講している講義で水彩画を教えている。その傍ら、カジ・アソウ・スタジオの運営にも携わり、スタジオの活動の一環として月に何度か大学や小学校に赴いて茶道を紹介し、毎週日曜日カジ・アソウ・スタジオ敷地内の茶室でティーセレモニー（茶会）を行っている。

2010年6月3日、ローウェルの小学校で児童が日本について勉強する「ジャパンデー」が体育館で催された（写真1参照）。紙や色画用紙を使った手作りの日本庭園が体育館の真ん中に作られ、その周りには学生が作成したポスターやブースが作られていた。体育館のステージ上に、ケイトは赤い大きな毛氈を敷いて茶席を設け、次々に茶道具を設置した。

用意が整うと、整列した小学1年生と2年生が舞台の上に設けられた茶席にやって来て、靴を脱いで毛氈の上に座った。正座で座っているケイトは着物の裾と姿勢を正した。児童たちもケイトに倣って正座をした。すると、ケイトは児童に「日本語でグッドモーニングは何て言うかな？」と優しく笑顔で尋ねた。するとある児童が大きな声で「オハヨー！」と言うと、ケイトは「ベリー グッド！『おはよう』はオハイオみたいでしょ。では、「おはよう」をもっと丁寧に言いたい時は、『ございます』を付けるのよ。そう、『おはようございます』と説明した。ケイトの後に続いて、児童たちは元気な大声で『オハヨウゴザイマス!!!』と言った。次にケイトは、児童たちに手を体の前で三角を作るように指導しながら、手本を見せて挨拶の所作

を教えた。児童たちは慣れない動作に、ちらちらとケイトや隣を見て確認しながらやっていた。子どもたちは、初めての座り方や初めての動作に興味していた（筆者フィールドノート、2010年6月3日）。

幼少の頃自宅に来ていた日本人の家政婦の「ミツさん」が、ケイトと日本文化との出会いであった。庭でミツさんが赤ん坊のケイトを抱いている写真（写真2）と、ようやく立ち始めたケイトが着物を着ている姿の写真（写真3）を筆者に見せながら、ミツさんについて語り始めた。ケイトの父親はアメリカ陸軍に勤務しており、1957年から1960年にかけて朝鮮戦争に赴くために日本在アメリカ陸軍基地に駐在していた。父親が日本で赴任している間にケイトが生まれた。彼女の両親は、ミツさんという家政婦を雇った。ミツさんはケイトと2人の姉の三人を可愛がったが、三姉妹のなかで末娘のケイトが一番ミツさんを慕った。ミツさんは、三人の娘たちに日本の遊びや習慣を教え、着物を着せることもあった（写真3）（インタビュー、2010年10月7日）。



写真1.（左上）小学校で茶道を教えるケイト・フィニガン。

写真2.（右）ケイト姉妹とミツさん。

写真3.（左下）ミツさんに着物を着せてもらったケイト。

フィニガン一家は日本を去ってから、ミツさんと連絡を取り合っていない。しかし、ミツさんから幼少期に教わった日本の習慣が、その後彼女の師匠である花見麻生から学ぶ数々に無意識に生かされることとなった。

花見麻生との出会いは20代の頃だった。アーティストとして既に活動していたケイトは、タフツ大学で教えていた花見麻生に師事した。花見麻生から絵画のみならず書道、俳句、茶道を学んだ。書道を習得したことにより水彩画の筆遣いが変わり、俳句や茶道を学んだことにより、季節感を大切に繊細な美を意識するようになったという（インタビュー、2010年10月7日）。

## 2 ジャポニズムの名残

### (1) ジム・シェイ

ジム・シェイ（アイルランド—ドイツ系アメリカ人、当時57歳）は、ロングフェローハウスの元館長である。彼は、マサチューセッツ州セーラムで生まれ、ウェンハムで育った。昼休みになると、ジムはロングフェローハウスから近くのデリへ行きスシ（Sushi）を頻繁に選ぶ。スシを選ぶので日本文化愛好家ということではない。彼は、以前、カリフォルニア州にあるアジア美術館に勤務していた。サンフランシスコに住んでいた頃、親しくなった日系人の友人に和食を食べさせてもらい、日本料理や箸の使い方を教えてもらったことが契機となり、以後、日本の物を嗜好するようになったと言った。ジムは日本文化と接触した動機をその日系人の友人であると語っていた途中、突然、そのことを否定した。

ちょっと待って。時代を遡らせて。私が5歳か6歳の頃、ある日曜日、母がセーラムにあるピボディー・エセックス博物館に連れて行ってくれて、そこで日本美術を見たんだよ。セーラムは私が生まれた町ね。そこにはたくさんの日本の展示物があって、私はそこで日本文化に初めて触れた。そこでアイヌの人びとが旅をしている様子が展示されていた。その展示場についてよく覚えているよ！二階にその展示はあったな。その写真は、入れ墨をしているアイヌの人がアメリカ人と一緒に映っている写真で見慣れないものだったよ。アイヌの人びとは、なんてエキゾチックなんだろう、なんて私たちと違う生活をしているんだと思ったよ。私は全員白人で英語しか話さない家庭で育ったものだから、英語以外に他の言語があるという感覚がわからなかった。

（インタビュー、2010年10月29日）

偶然にも、当時ジムが勤務していたロングフェローハウスには、チャールズが日本滞在期間に蒐集したアイヌの人びとの写真がアーカイブに保存されている。ジムが館長を務めていた頃、時々、チャールズ・ロングフェローが遺した日本からの蒐集品についてボストンの人びとに知ってもらう企画を、次に記すローレンと共に積極的に行った。館長を務めていた頃もそうだが、退職した現在も彼は日本製の銅製品、巻物、版画、陶器などのアンティークを蒐集し、それらを自宅に飾っている。

## (2) ローレン・マルコム

ロングフェローハウスの学芸員ローレン・マルコム（2010年当時67歳）は、ジムの部下だった（2015年逝去）。彼女は、全ての蒐集品の管理を任されていたが、筆者がロングフェローハウスでインターンシップを行っていた2009年から2010年までの毎週金曜日は違った。筆者がいる際は、一緒に日本コレクションの整理、手入れ、調査を行った。日本の蒐集品や日本文化について筆者や同僚に語る時のローレンは、絶えず笑顔で情熱的だった。ローレンの主な業績の一つとして、日本コレクションの目録を作成したことである。彼女は、1986年から1995年まで英語を教えながら生活していた日本滞在中、多くの日本文化を探求した。本研究のインタビューをお願いした日、筆者に見せるためわざわざ自宅から仕事場に日本で蒐集したコレクションをもってきてくれた。御朱印帳を一頁一頁開いて、墨字で書かれた寺の名前を見ながら、今まで参拝した寺について話してくれた。ローレンの笑顔は絶えず続く。次に見せてくれたのは、和布の端切れの数々である。それらの端切れをゆっくり手で撫でながら、和布にはアメリカの布地にはない手触りやデザインがあるので好きだと語った。さらに、取り出したのは、日本の古い小学校の教科書と蛇の目傘である。この教科書と蛇の目傘は、昔、海兵だった父親が日本に行った時のお土産だという。

ローレンが日本文化に関心を寄せるようになったのは、育った環境のなかで日本製の物に囲まれていたことに要因があると言う。マサチューセッツ州ブルックライン（地図参照）の彼女の祖父母の家には、1920年に結婚した際、結婚祝いとして贈られた日本の達磨の置物があった。ローレンは、その達磨の置物について思い出しながら、「20世紀、日本の物は人気があったのよ。日本製の物を所有したり探したりするのが一般的だったわ。そしてそれを家宝にするの」（インタビュー、2010年10月8日）と言った。この語りは、ハリス（1975）が日本の美術品は西洋の人びとを魅了したジャポニズムの波がボストンにあったことを示している。祖父母の家にあった物だけではなく、先に述べた父親が持って帰ってきたお土産の存在も大きかったようである。それらには西洋にはない趣や存在があるという。

父が第二次世界大戦から帰還した時や、1950年初め横須賀の米軍基地に駐在していた時にくれたお土産の数々が父との思い出の品々なのよ。木製の着物を着ていたお人形や、徳利を持って帰ってきたわ。当時、徳利を知らなかったから花器だと思っていたの。生け花の本もあったわ。おもちゃは凄かったわ。牧草に見立てたシートの上に、巻きねじがついたあひるや猫がいたの。でも壊れちゃったから解体したら、なんと空き缶からできていることがわかったの。なんてよく考えられているのと思ったわ！

（インタビュー、2010年10月8日）

## (3) ベアード・キャンベル

鍼灸師のベアード・キャンベル（当時41歳・ヨーロッパ系アメリカ人）は、ボストン日本協会で副会長としても勤めている。ボストンの人びとに向けてほぼ毎月様々な日本文化に関する講演会や行事を企画運営している。プライベートでは三船敏郎出演の作品やサムライ映画を見ることを趣味としている。ベアードが日本文化と接触した動機を話してくれた。

僕がね、(日本文化や三船映画に)興味あるのは、幼少時代に影響している。2歳か3歳の頃、家族がボストン美術館に連れて行ってくれた。*Nazeka zenzen wakaranaike do* (「なぜか全然わからないけど」は原語。他は英語で著者が日本語に訳した)、自然と日本美術のセクションに足が向いてずっとそこを離れようとしなかった。そうしたのは、恐らく祖父母の家にあった装飾品に関係しているのではないかと思う。僕の父方と母方の祖父は両方とも日本に関連する仕事をしていた。父方の祖父は神戸で銀行員だった。彼の家には、北斎の波の浮世絵や日本文化に関する本があった。母方の祖父は、1940年代、50年代に日本の家具の貿易商だったので、家には障子やふすまなどがあったよ。きっと、幼少の頃にみたそういうものが影響しているんだよ...

(インタビュー、2010年5月4日)。

ベアードは、祖父母の家とボストン美術館で見た日本の装飾品による記憶が、その後、日本文化に触れる度に蘇り、日本文化に対する探究心をさらに駆り立てた。彼は嬉しそうに、侍の真似をしていた頃の思い出話を続けた。「幼少の頃に見た映画のなかの侍が『分かります』『分かりません』と言っていた。僕は当時日本語を知らなかったけど、その侍に続いて“Wakarimasu” “Wakarimasen” と真似していたよ。そうやって日本語の言葉遣いを学んでいった」(インタビュー、2010年5月4日)。

### 3 メディアの産物からの派生

#### (1) シェーン・ティスク

進太鼓 (Shin Daiko) の設立者の一人シェーン・ティスク (当時 32 歳) は、白人が多数を占めるミネソタ州の町で生まれ育った。パークッションリストだった彼は、2007年マーク・H・ルーニーの下で太鼓を学び、大太鼓ニューイングランドの太鼓奏者となった。2012年、大太鼓ニューイングランドから独立し、他の仲間たちと新しい太鼓グループ「進太鼓」を結成した。現在、平日はエンジニアとして働き、週末、ボストン各地で势力的に太鼓の演奏を行っている。シェーンの妻グレースは彼の奨めで太鼓を始め、大太鼓ニューイングランドの太鼓奏者となった後、シェーンと共に進太鼓を立ち上げた。グレースは意欲的な日本好きで学部ではジョン・万次郎について卒業論文を執筆した。アーティスト兼写真家のグレースは小説 *The Sea-God at Sunrise* (2012)、写真ドキュメンタリー集 *Breaking All the Rules: Cosplay and the Art of Self Expression* (2013) を出版した。彼女は、熱狂的なアニメファンで、毎年行われるアニメ大会カツコン (*Katsukon*) へ参加することを生き甲斐としており、大会前からアニメのキャラクターが着ている服を再現した本格的な衣装を作る。

筆者は、彼らの自宅を数回尋ねインタビューを行った。自宅のリビングルームの壁には、青森県の太鼓グループのポスターと和柄の布地が貼って飾られている。リビングルームには、アメリカで一般的には売られていない碁盤が置かれていた。棚には日本映画とアニメのDVDが何段にも渡って詰めて並べられている。

白人しかいなかったミネソタの町で育ったシェーンが日本文化と出会ったのは、2004年ボストンに移り住んでからのことだという。偶然、黒沢映画を観たことが契機となって黒沢映画や

日本の古い映画にのめり込むようになった。シェーンは熱く黒沢映画について語り始めた。

グレースと結婚する以前、(太鼓を始める前の)僕にとっての楽しみといえば、黒沢明の映画を観ることだった。僕は、1960年代以前に作られた古い映画が好きなのだ。元々、いわゆる「オールドスパゲッティムービー」と呼ばれるアメリカの古い映画が好きなんだ。オールドスパゲッティムービーの原点は日本の古い映画なんだよ。だから僕は、アメリカ映画の原点の黒沢映画が好きなのだ。『用心棒』『七人の侍』『赤ひげ』『生きる』がお気に入りさ。アメリカ映画はそこで起きていることをそのまま見せているじゃない？でも、日本映画は人びとがどうやって暮らしているのかということまで映画で見せている。

(インタビュー、2016年10月1日)

黒沢映画との出会いから3年後、シェーンは大太鼓ニューイングランドで太鼓を学び始めた。パークッションとは異なり、日本独特の所作などが入る太鼓に没頭するようになった。その後、囲碁も始め、今では上級レベルの腕前である。アニメや漫画に熱狂的なグレースと結婚してからは、グレースによる手作りの日本のアニメキャラクターの衣装を着せられて、グレースが大好きなアニメ大会に夫婦で一緒に行く。現代的な日本文化を好む妻のグレースとは対照的に、シェーンは昔の日本人の繊細な心情、礼儀正しさ、所作などを重んじる古風な日本文化を嗜好する。相互の嗜好は異なるが、結婚生活のなかで自分たちの好きな日本文化を共に楽しみ、刺激を与え合っている。

## (2) デイビッド・バーガー

金融関係の会社員であるデイビッド・バーガー(当時47歳、白人)も、大太鼓ニューイングランドのセミプロ太鼓奏者である。彼は、白人しかいないインディアナのある町で生まれ育った。彼が日本文化と出会ったのは、1970年代、テレビのスポーツ番組で見た相撲だった。まげと裸で廻し姿の力士を見て、今まで見たこともない日本文化に興味を持ち、1981年放映された*Shogun*というテレビシリーズやサムライ映画を見るようになった。「何ていうか、日本文化は知的好奇心をくすぶるよ。日本のストーリーを見ていると、どうやって(日本)社会が成立しているのか知りたくなったよ」(インタビュー、2010年10月8日)。デイビッドの目には、ブラウン管の向こうにある日本文化には、厳格で礼儀正しさがあり、数多くの決まり事があるように見えた。さらに、彼の日本文化探求の旅は続き、日本の歴史本を読む読書クラブに参加した。デイビッドは筆者とのインタビューに応じながら、彼の宝物という大きな一冊の本『日本百科事典—そろばんから草履まで (*Encyclopedia of Japan: Abacus to Zori*)』を鞆から取り出した。その本でさらに日本文化について調べ続けた。ボストンに移った後、日本語を勉強し、大太鼓ニューイングランド(ONE)で太鼓を初め、現在は週末に地元で開催される祭りで太鼓演奏活動を行っている。彼曰く、自宅に玄関口からすぐ靴を脱ぐGenkan(インタビューは英語で行われていたが、このGenkanは原語のまま)スペースを作り、食べる前には“*Itadakimasu*”食後は“*Gochisousama*”と言う日本の習慣を取り入れているそうである(インタビュー、2010年10月8日)。

### 4.3.3 ベン

自営業をしているベン（当時42歳、アフリカ系アメリカ人）はケンブリッジで育った。1990年から1992年まで日本で働いていた。

ベンが日本文化と出会ったのは小学生の頃である。毎週月曜日と火曜日、5つの日本の漫画を見ていた。そのなかでも、『宇宙戦艦ヤマト（英語題：*Star Blazers*）（1979年よりアメリカにて放映）』が大好きであった。「2時半か3時から始まる番組に間に合わせるために、毎日学校から走って帰ったよ」（インタビュー、2010年10月1日）。『宇宙戦艦ヤマト』が契機となり、たとえば *Shogun*（1980）の本やテレビドラマ、イギリス出身のバンド *The Vapors* の *Turning Japanese*、坂本龍一率いる *Yellow Magic Orchestra* などのメディアから流れる日本に関連するアニメや音楽に関心を持つようになった（インタビュー、2010年10月1日）。これらが動機となって、大学で経済学と日本語を勉強し、卒業後日本の銀行で勤務した。日本で日本人の女性と結婚し、その後アメリカに帰国した。家では、ベンも妻のように、子どもにも日本語の『こどもちゃれんじ』を読み聞かせているという。筆者との別れ際、インタビューが行われた次週に日米協会で開催される日本映画ナイトに、宮崎駿監督作品の『崖の上のポニョ』を子どもと一緒に見に行くよと言いながら、その場を去った。

マークス（23歳、プエルトリコ系アメリカ人）もベンと同じく、祖国プエルトリコで『セーラムーン』が契機となって日本文化に興味を覚え、日本語を勉強した。その後、日本に留学をした。日本について勉強することによって、次のように考えるようになった。

日本についてまだ勉強を始める前、中国文化も日本文化も同じ文化として捉えていた。でも、勉強をして日本に行ってみると、中国文化は感情を表現する一方で、日本文化は丁寧にすること、感情を表に出さないことがわかった。そのことは、アメリカでプエルトリコ人の僕がメキシコ人だと言われることと同じだということに気がついたよ。日本文化を知ったことによって、世界に対して敏感（sensitive to the world）になることができたよ。

（インタビュー、2010年9月24日）

## V 考察

調査対象者は現在も日本文化を探求し続けている。ここでは、その動機ともなった要因「日米関係が直接個人に与えた影響」「ジャポニズムの名残」「メディアの産物からの派生」の3つの分類結果を考察したい。

### 1 日米関係が直接個人に与えた影響

4.1のマーク、ガートルード（ユリ）、ケイトの共通項として見られたのは、1) 家庭のなかに日本の習慣を教えてくれる日本人の母親や家政婦がいた、2) 自発的・非自発的に拘らず日本文化へのアクセスが一旦途切れた（空白の時間を経験した）、3) その後、太鼓、書道、茶道、俳句との出会いが引き金となって、日本文化を探求する過程が観察できた。その背景には、日米関係が引き起こした社会情勢が関連している。

たとえば、白人が多数を占めるフェアヘブンやセーラムで育ったマークやガートリユード（ユリ）の場合、ジャパンバッシングが、アメリカ白人主流社会に同化しなければならないという気持ちに拍車をかけた。そのために彼らは、日本人であることを拒絶する時期があった。しかし、太鼓との出会いにより日本人であるということを肯定し、表現し、日本文化を発信する立場に転換した。日本人であることの表現や日本文化の発信は、マークが太鼓を極め師範となって生徒たちに太鼓を教えていること、ガートリユード（ユリ）が日本の芸事をするだけでなく公共の場で「ユリ」という日本名を使うことから窺える。

日本に米軍基地が設置されたことは、ケイトとガートリユード（ユリ）の人生にも影響を与えた。日本に駐留していたケイトの父親と家族はミツさんと出会い、在日米軍兵だったガートリユード（ユリ）の父親は母に出会った。ケイトとミツさん、ガートリユード（ユリ）の両親が出会わなければ現在の彼らはいないであろう。ケイトの場合、ケイト・フィニガンという芸術家として確立するための技術は、花見麻生に師事した際に得たものであろう。しかし、花見麻生から学ぶことに共感を覚えたのは、幼少の頃にミツさんが教えてくれた日本の遊びや習慣、日本人とのコミュニケーション方法が潜在意識に残っていて親近感を覚えるものだったのではないだろうか。これらは結果的に「アイデンティティの再覚醒」なのだろうか。

太鼓集団の代表であるマークとカジ・アソウ・スタジオの代表であるケイトは、アメリカと日本の架け橋になることを目的として活動している。しかし、マークの意志は、ユーン（2001）の研究と通じるかもしれない。ユーン（2001）が研究対象としたニューヨークの僧太鼓に所属するアジア系アメリカ人にとって、太鼓はアジア系アメリカ人としてのアイデンティティを表現する手段であるという。「太鼓には、中国人、韓国人、日本人といった境界線を越える可能性を有している。すなわち、日本の太鼓であっても、『汎アジア』を表現することができる」（425-426頁）。マークがONEの代表であった頃にかかれた大太鼓ニューイングランドのウェブサイトでは以下のように書かれている。

大太鼓ニューイングランドは、太鼓道の意味を問いかけながら、日本がもつ美の繊細さとアメリカがもつ豪快さを融合させて現代の形を作り出しています。私たちの目的は、アメリカの聴衆者に太鼓を知ってもらうことと、アジア系アメリカ文化への評価と理解を促すことです。

（大太鼓ニューイングランドのウェブサイトより）

## 2 ジャポニズムの名残

5.2のジム、ローレン、ベアードの語りから、彼らは、幼少の頃に19世紀から蒐集された博物館や祖父母の家にあった日本の写真、日本製の美術品や工芸品やおもちゃや家具といった物品を目にして魅せられていた。成年になって日本映画や日本の美術品などを通して日本文化に再び触れたことにより、更なる日本文化探求の道を歩んでいることがわかる。ここで着目したのは、これらの博物館や祖父母の家にあった展示品や蒐集品である。テネンバウム、シュリシュトマン、ザンガー（2004）の研究でも、幼少時の博物館での経験は子どもの発達過程に影響を与える結果がでている。ただし、本論では、対象者の階層について問題視しなかった。



では、博物館の意味を問うたベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』や、エドワード・サイードの『オリエンタリズム』を通して、ジム、ローレン、ベアードの日本文化への眼差しをどのように捉えるべきなのだろうか。筆者は、この3人にとっての日本文化の意味は、従来のオリエンタリズムから語られてきた本質と異なるのではないかと考える。たとえば、アンダーソンやサイードで語られたオリエンタリズムは、博物館の蒐集品に植民地や支配地域との権力関係や支配関係が窺われる。一方、ジム、ローレン、ベアードに影響を与えた対象物からそのような力関係は見られなかった。ピボディー・エセックス博物館やボストン美術館の展示品は、モース、フェノロサ、ビゲローが日本滞在中に日本の日用品や美術品に心を動かされて持ち帰ったものである。ボストン美術館の運営に関しては、当時では珍しく日本人の岡倉天心を招き、日本人の考えを取り入れている。また、ローレンとベアードの祖父母宅にあった日本の品々も、当時のジャポニズムの影響を受けているものである。すなわち、日本の工芸品や美術品を讃美する肯定的な流れの上に対象物が存在していたと筆者は考える。植民地－被植民地という力関係が内在する対象物と、その文化への礼讃や憧憬的である対象物とでは、後世に与える影響（子どもの発達過程）は異なるであろう。

### 3 メディアの産物からの派生

パターン3.のシェーン、デイビッド、ベンにとって、日本文化への探求の始まりは、映画、アニメなどのメディアであった。シェーンやデイビッドがインタビューで述べたように、そこで起きていることをそのまま見せるアメリカ映画と違って、日本映画は細部に渡る人びとの暮らしぶり、日本社会の構造、日本特有の所作や考え方を描いている点が知的好奇心を駆り立てているのであろう。

彼らの日本文化探求の要因と現在の生活を照合すると、彼らは日本の文化を使って職業や仕事に繋げている。このような事例は、日本の文化を趣味から専門に移行するフクナガの研究のなかに現れた事例と重ね合わせることができる。フクナガ（2006）によると、メディアで流れる日本に関する媒介物には神秘性、異文化的な性質、異国情緒、そしてアメリカ文化にはない格好良さがあり、その未知なる世界をさらに知りたいという探求心が駆り立てられた結果、進路に繋げる事例が挙げられている。ベンとマーカスもこの事例と全く同様に、アニメが要因となって大学で日本語を学び、日本で就職・留学をした。シェーンとデイビッドの場合は、社会人になってから日本文化に接触した。日本で就職・留学するといった過程はなかったが、現在、太鼓のセミプロ奏者となった。

## VI 結論

本エスノグラフィーを進めていくなかで、対象者が全員アメリカ市民なのにもかかわらず、日本文化を探求していく契機となった要因が、日米関係のなかで起こった社会的出来事が直接的に関連している事例、昔のジャポニズムの蓄積を享受した事例、メディアの産物によって芽生えた好奇心が更なる好奇心へと導いた事例に分かれた。

この研究で出会った被面接者を通して、私たち日本人が知らない日本の歴史を知ることとなっ

た。日本が開国する以前にあったジョン・万次郎とアメリカの捕鯨船の人びととの交流、明治時代に日本に滞在したアメリカ人が持ち帰った日本の思い出、在日米軍基地に駐留したアメリカ軍人と日本人の交流、アメリカ兵が持ち帰った土産品、アメリカ人と日本人の結婚、製品化されたアニメ、漫画、映画、これら全ては次世代を繋ぐ遺産になっている。すなわち、日本や日本の製品を嗜好する先人たちが現在の日米交流の礎を築いたことがわかる。さらに、現代人がテクノロジーの発展を生かして、異国に行なった文化発信や異文化理解の試みが現在そして未来の交流に続いている。ここでもう一度、マーカスの言葉を引用したい「日本文化を探求するのは、世界に敏感でいたいから」(インタビュー、2010年10月5日)。彼の一言は、全ての調査対象者に通じている。

本論はまだ未完成である。本論の結果は分析を深める余地が大いにあるので、その作業は次の課題としたい。

### 参考文献

- Abu-Lughod, Lila. "A Tale of Two Pregnancies." In *Women Writing Culture*, edited by Ruth Behar and Deborah A. Gordon, 339-349. Berkley: University of California Press, 1995.
- . "The Interpretation of Culture (s) after Television." In *The Fate of Culture: Geertz and Beyond*, edited by Sherry B. Ortner, 110-135. Berkley: University of California Press, 1999.
- Befu, Harumi. "The global context of Japan outside Japan." In *Globalizing Japan: Ethnography of the Japanese presence in Asia, Europe, and America*. 2<sup>nd</sup> ed. edited by Harumi Befu and Sylvie Guichard-Anguis, 3-22. New York: Routledge Curzon, 2003.
- Denison, Rayna. "The Global Market for Anime: Miyazaki Hayao's Spirited Away." In *Japanese Cinema: texts and contexts*, edited by Alastair Phillips and Julian Stringer, 308-321. London: Routledge, 2007.
- Emerson, Robert M., Rachel I. Fretz and Linda L. Shaw. *Writing Ethnography Fieldnotes*. Chicago: The University of Chicago Press. 1995.
- Fukunaga, Natsuki. "Those anime students': Foreign language literacy development through Japanese popular culture." *International Reading Association* 50, (2006): 206-222.
- Glesne, Corrine. *Becoming Qualitative Researchers: An Introduction*. 3<sup>rd</sup> ed. 109-128, 129-146. Boston: Pearson Education, Inc., 2006.
- Guichard-Anguis, Sylvie. "Japan through French eyes: 'The ephemeral' as a cultural production." In *Globalizing Japan: Ethnography of the Japanese presence in Asia, Europe, and America*. 2<sup>nd</sup> ed. edited by Harumi Befu and Sylvie Guichard-Anguis, 209-221. New York: Routledge Curzon, 2003.
- Harris, Neil. "All the World a Melting Pot? Japan at American Fairs 1876-1904." In *Mutual Images: Essays in American-Japanese Relations*, edited by Akira Iriye, 24-53. Cambridge: Harvard University Press, 1975.
- Houchins, Lee. "John Manjiro: 1827-1898." In *Abroad in America: Visitors to the New Nation 1776-1914*, edited by Marc Pachter and Frances Stevenson Wein, 92-103. Washington D.C.: Addison-Wesley Publishing Company, 1976.
- Kaji Aso Studio. 2009. *Courses and Events 2009-2010*. Boston: Kaji Aso Studio.
- . 2010. *Courses and Events 2010-2011*. Boston: Kaji Aso Studio.
- Kenrick, Vivienne. 2002. Personality Profile: Peter Grilli. *Japan Times*. August 17. <http://search.japantimes.co.jp/cgi-bin/fl20020817vk.html> (accessed November 7, 2010).
- Laidlaw, Christen Wallace. *Charles Appleton Longfellow: Twenty Months in Japan, 1871-1873*. Cambridge, MA: Friends of the Longfellow House, 1998.

- Marcus, George. E. "The Uses of Complicity in the Changing Mise-en-Scène of Anthropological Fieldwork." In *The Fate of Culture: Geertz and Beyond*, edited by Sherry B. Ortner, 86-109. Berkley: University of California Press, 1999.
- Martinez, Dolores .P. "SEVEN SAMURAI AND SIX WOMEN: Kurosawa Akira's Seven Samurai (1954)." In *Japanese Cinema: texts and contexts*. edited by Alastair Phillips and Julian Stringer, 112-123. London: Routledge, 2007.
- Miyako Taiko. Last modified 2016. Accessed September 28, 2016. <http://www.markhrooney.com/miyako-taiko/>
- Odaiko New England. Accessed November 7, 2010. <http://onetaiko.org/about-us/history.shtml>.
- Ono, Kent A. " 'America's' Apple Pie: Baseball, Japan-Bashing, and the Sexual Threat of Economic Miscegenation." In *Contemporary Media Culture and the Remnants of a Colonial Past*. edited by Kent A. Ono, 49-69. New York: Peter Lang Publishing, 2009.
- Ortner, Sherry B. Introduction. In *The Fate of Culture: Geertz and Beyond*. edited by Sherry B. Ortner, 1-13. Berkley: University of California Press, 1999.
- . "Thick Resistance: Death and the Cultural Construction of Agency in Himalayan Mountaineering." In *The Fate of Culture: Geertz and Beyond*. edited by Sherry B. Ortner, 136-163. Berkley: University of California Press., 1999.
- Osius, Ted. *The U.S.-Japan Security Alliance: Why It Matters and How to Strengthen It*. West Port, CT: Greenwood Press, 2002.
- Parrillo, Vincent. N. *Strangers to These Shores* 9<sup>th</sup> ed. 273-280. Boston: Pearson Education, Inc., 2009.
- Perkins, Dorothy. *Encyclopedia of Japan: From Abacus to Zori*. New York: Roundtable Press., 1991.
- Peshkin, Alan. "Appendix : In Search of Subjectivity – One's Own." In *The Color of Strangers, The Color of Friends, The Play of Ethnicity in School and Community*. 285-295. Chicago: University of Chicago Press, 1991.
- Phillips, Alastair. & Stringer, Julian (eds.), *Japanese Cinema: texts and contexts*. 1-24. London: Routledge, 2007.
- Rosaldo, Renato I. "A Note on Geertz as a Cultural Essayist." In *The Fate of Culture: Geertz and Beyond*. edited by Sherry B. Ortner, 30-34. Berkley: University of California Press, 1999.
- Sewell, William. H. In *The Fate of Culture: Geertz and Beyond*. edited by Sherry B. Ortner, 35-55. Berkley: University of California Press, 1999.
- Shweder, Richard. "The surprise of ethnography." *Ethos* 25, Issue 2, (June 1997): 152-163.
- Shin Daiko. Accessed September 28, 2016. <http://www.shindaiko.com>.
- Soh Taiko. Accessed March 25, 2010. <http://www.sohdaiko.org/history.html>.
- Strauss, Claudia & Quinn, Naomi. *A Cognitive Theory of Cultural Meaning*. Cambridge, UK: Cambridge University Press, 2001.
- Stuart, Paul M. *A Cross-Cultural Encounter: West Meets East* 2<sup>nd</sup> ed. Tokyo: The Japan Times, 1993.
- Tenenbaum, Harriet R., Gabrielle Rappolt-Schlichtmann, and Virginia Vogel Zanger. "Children's learning about water in a museum and in a classroom." *Early Childhood Research Quarterly* 19, Issue 1. (2004): 40-58.
- Yomota, Inuhiko. "The Menace from the South Seas: Honda Ishirô's *Godzilla* (1954)." In *Japanese Cinema: texts and contexts*. edited by Alastair Phillips and Julian Stringer, 102-111. London: Routledge., 2007.
- Yoon, Paul. "She's Really Become Japanese Now!: Taiko Drumming and Asian American Identification." *American Music* 19, no. 4, (Winter, 2001): 417-438.
- Whitfield-Manjiro Friendship Society Inc. Last Modified 2016. Accessed September 26, 2016. <http://www>

[whitfield-manjiro.org/manjiro-trail.html](http://whitfield-manjiro.org/manjiro-trail.html)

ベネディクト・アンダーソン（白石隆・白石さや訳）（2008）『定本 想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』書籍工房早山。

エドワード・W・サイド（2012）『オリエンタリズム上・下』平凡社。

渡辺靖（2012）「序論 ソフト・パワー研究の新たな地平線へ向けて」『ソフト・パワーのメディア文化政策』新曜社。

佐藤卓己（2012）「はじめに『メディア文化政策』とは何か」『ソフト・パワーのメディア文化政策』新曜社。

ピボディー・エセックス博物館（1989）『モースのみた日本展』小学館。

## 付録 1.

### Questions:

- What is Japanese culture that you consider in your life? What kind of Japanese activity (ies) do you do?
- Why do you like Japanese culture?
- What was your first event to touch with Japanese culture?
- What makes you explore and continue exploring Japanese culture?
- Why do you like the Japanese activity (ies) that you are doing now?
- What attraction do you feel about Japanese culture?
- What do you learn during the event?
- What efforts do you put to know Japanese culture through Japanese culture?
- Did you study Japanese language?
- Do you study Japanese history, philosophy, and so on?
- Why did you choose not Chinese but Japanese? What do you distinguish between Chinese culture and Japanese culture?
- Have you ever lived in Japan? If so, when and how long?
- Do you have a Japanese spouse, boyfriend or girlfriend?
- How do you make use of the Japanese cultural element for your life?
- What does Japanese cultural activity (ies) have meaning for your life?
- What thoughts or goal do you have to organize the event if you are a Japanese cultural event organizer, ?
- What do you teach your student if you are a Japanese cultural teacher?

ボストン大都市圏におけるアメリカ市民の日本観（志賀）

付録2. 2010年インタビューと参与観察を行った時間表

DATE & TIME	LOCATION	ACTIVITY TYPE	DESCRIPTION	HOURS
September 16 (Sat) 5:00p.m.-10:00p.m.	Kaji Aso Studio	Participant Observation & Finding the participants	Open House: People came to the house for being interested in Japanese art or general art, or seeking for the opportunity to touch with Japanese culture	5h
September 21 (Tue) 8:00p.m.-10:00p.m.	Odaiko New England	Participant Observation	Observing the students and the instructor.	2h
September 22 (Wed) 12:30p.m.-2:00p.m.	MIT Japanese Lunch Table	Participant Observation & Finding the participants	MIT students and the general people who sought for the chance to talk with or make a friend with the Japanese join the lunch table. The Japanese came to seek for chances to know the American. The Japanese expatriate wives and Showa students attended.	1.5h
September 24 (Fri) 5:00p.m.-6:30p.m.	Sheryl Library	Interview	Interview with Marcus. Male. 23 years old. Hispanic.	1.5h
October 1 (Fri) 1:30p.m.-2:30p.m.	Sheryl Library	Interview	Interview with Ben. Male. 42 years old. African-American.	1h
October 1 (Fri) 7:30-10:30	The House of the participants	Interview & Participant Observation	Interview with a married couple, Grace, female, 29 years old, Chinese-American; Shane, male, 32, Caucasian.	3h
October 5 (Tue) 11:00p.m.-0:00a. m.	The office of Odaiko New England	Interview	Interview with Mark, the executive director of Odaiko New England. Male. 37 years old. Half-Japanese.	1h
October 8 (Fri) 3:30p.m.-4:30p.m.	The Longfellow National Historic Site	Interview	Interview with Lauren. Female. 67 years old. Caucasian.	1h
October 8 (Fri) 6:30p.m.-8:00p.m.	Sheryl Library	Interview	Met with Dave. Male. 47 years old. Caucasian.	1.5h
October 9 Saturday 1:00p.m.-2:30p.m.	Kaji Aso Studio	Interview	Met with John, a Haiku teacher at Kaji Aso Studio and a committee member of Boston Haiku Society. Male. 49 years old. Caucasian.	1.5h
October 22 Friday 1:00p.m.-2:00p.m.	The Japan Society at Showa Boston	Interview	Interview with Bhaird Campbell, the vice president of the Japan Society of Boston. 41 years old. Caucasian.	1h
October 29 Friday Noon-12:45p.m.	The Longfellow National Historic Site	Interview	Interview with James Shea, the manager of the Longfellow National Historic Site. 57 years old. Caucasian (Irish heritage) .	0.75h
October 31 (Sun) 9:00p.m.-10:00p.m.	My house	Interview	Interview with Gertrude Yuri, one of Taiko student. 47 years old. Japanese-American. (her mother is Japanese) .	1h
November 13 (Sat) 4:00p.m.-6:00p.m.	Lesley University Hall 1 <sup>st</sup> floor	Participant Observation	Observing the Japan Festival, and ONE Taiko performance and their audience.	2h
December 11 (Sat) 5:00p.m.-11:00p.m.	Odaiko New England	Participant Observation	Observing the Winter Extravaganza 2010	6h

